

純ではありませんでした。というのもユマニストたちは教父たちが行った選別操作を拒んだからです。彼らはまず古代文化が一体どのようなものであったのかということを確認し、それを全体として研究し、理解したいと思ったのです。ここで注意しておかなければならないのは、ルネッサンスのユマニストの大多数が、彼ら自身、キリスト教徒であったということです。だから彼らはキリスト教に対立する異教文化に依拠しようとは思いませんでした。そうではなくキリスト教に立脚しながら、古代文化をそれ自身として把握し、理解したいと思っていたのです。従って問題は、聖書の啓示のほかに、真理の別の源泉、別の伝統が存在しうるのはなぜか、そしてそれはどのようにしてなのか、ということだったのです。どうしてこのような伝統の共存が可能になるのかということの説明する図式は、当時、いくつか存在していました。第一の説明は、旧約聖書の啓示（特に神がモーゼに与えた啓示）が大昔にエジプト人へもたらされ、エジプトからギリシアへ移り、そこでプラトンやストア派の賢人たちといった哲学者がその要素を拾い集めたのだ、というものです。第二の説明は、カルヴァンが部分的に採り入れた説明なのですが、次のようなものです。（異教をも含めた）人類の学問的知識や英知というものは、それらがキリスト教によって受け入れられ、認められるようなものである場合には、人類全体に対して神がお与えになった様々な賜物と、人間理性と協働して、価値のある学問的知識（医学、法律など）や英知を作り上げる一般恩恵とに由来しているのだということです。合理主義的で全人類を対象とするこの観点はカルヴァンにとってはきわめて重要なものです。実際、カルヴァンは受けた教育からすれば法律家だった人です。より正確に言うなら、ユマニスト的な法律家でした。彼はローマの法律や諸制度に心から感嘆し、そこに政治、社会、道徳に関する優れた文化の一例を、しかもキリスト教とは別個でありながら、矛盾しない一例を見たのでした。第三の説明はルネッサンス期には大変な成功をおさめたもので、カルヴァンの時代には大多数の人がそれを支持しようとしていたものです。それは人類の起源（アダム）から、神に由来する知恵が人間に託され、それが異

なっているが調和している2つの伝統を通して表現されてきたのだ、とするものでした。2つの伝統とは聖書の伝統と英知の秘教的な伝統ですが、この後者の伝統は、宗教と哲学に関する偉大な、しかし聖書には基づいていない（従って異教的な）あらゆる文化の中に現れているものです。この理論の独自なところは、このように真理に近づく道が2つあると主張しながら、同時にキリスト教と異教文化との一貫性を強調するという点にありました。多くのユマニストはこの理論のおかげで最も広い意味で理解された古代文化に対して自分たちが感じていた愛情を正当化することができたのですから、明らかにこの理論は彼らにとって魅力あふれる理論だったのです。しかしこの理論にはキリスト教の独自性、つまり特権的な、あるいは独占的な仕方でも啓示された真理を代表するものであるというその自負を消し去ってしまう危険がありました。もちろんこの理論が真理の啓示の様々な源泉には平信徒は近づくことはできないが、ユマニストのような洗練された知識人は近づくことができるとする、知識人に対する一つのテリート主義的理論であることは言うまでもありません。

以上で述べてきたようなコンテキストに照らして、カルヴァンの著作が知的、哲学的かつ社会的な次元で理解されなければなりません。カルヴァンは今述べました第三の説明をきっぱりと拒んでいます。カルヴァンの時代のキリスト教の中で、彼をツヴィングリのような改革者やその他多くのユマニストたちと比べてみますと、彼はこのような考え方に最も厳しく反発し、それを拒否した人物であり、あらゆる人に等しく与えられた神の啓示の正当な源泉としては、ただ聖書の権威だけを最も明確な仕方でも肯定した人物でした。実際、カルヴァンにとって神の啓示は、聖書が証している神の御言葉の中にしか存在しないのであり、彼にとって聖書は神の真理を公に宣言するものなのです。このように排他的であると同時に（もしこの色あせた言葉を用いることが許されるなら）“民主的な”立場に立って、カルヴァンは私が言及した最初の2つの説明の要素をいくつか認めるのです。最初の説明に関しては、カルヴァンはそれを部分的に採用しています。彼は異教が聖書の啓示